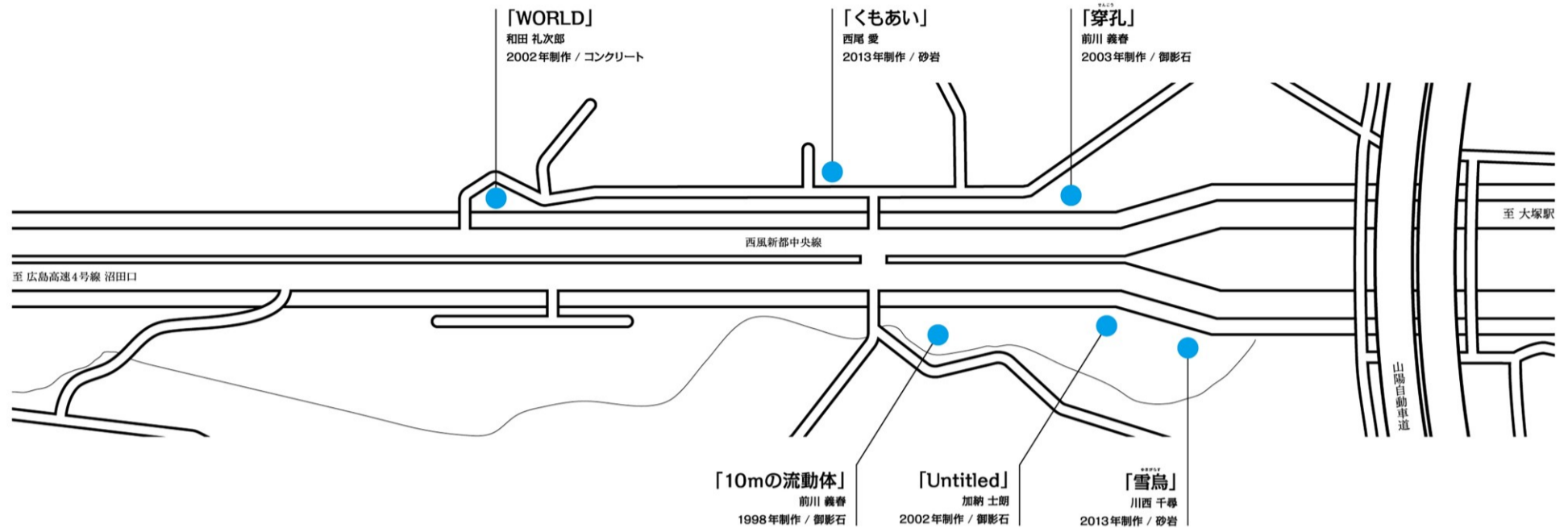


あさみなみ芸術化構想・大塚シンボル通りへの作品設置

広島市立大学「あさみなみ芸術化構想」や大塚上町内会「まちづくり推進事業」の一環として、西風新都の玄関口となる「大塚シンボル通り」に、芸術学部・大学院の学生・教員の作品を展示することや、地域住民による沿道の花の植栽などを通して、芸術のある豊かで優しいまちづくりを推進しています。大学と地域住民、広島市が協働して、地域の活性化と若い芸術家育成に努めています。

◆大塚シンボル通りアートマップ



◆大塚シンボル通り(西風新都中央線) 設置作品解説

	作品写真	制作意図	作品写真	制作意図	
A	<p>[2010年度設置] 作品名:「Untitled」 H 1.7m×W 4.0m×D 2.0m 御影石 (2002年制作)</p>	<p>抽象的で不定形な形態を丁寧に磨き込むことにより、自然の光を拡散的に反射させることができます。そのことにより彫刻に柔らかく優しい性格を持たせると共に、より大きな空間に影響を及ぼすことが可能となります。</p> <p>自然環境の中で、彫刻が周囲と調和しながらも、より大きな効果を生む作品を成立させようと思いました。</p> <p>作者: 加納 土朗 広島市立大学大学院芸術学研究科修士 国立ローマ美術大学留学 ニュルンベルク造形芸術大学留学 現在、ニュルンベルク在住</p>	B	<p>[2010年度設置] 作品名:「穿孔」 H 1.6m×W 8.5m×D 1.3m 御影石 (2003年制作)</p>	<p>御影石をダイヤモンドコアドリルで穿孔(せんこう)した後に、鉄のくさびで石を割り、自然の荒々しい岩肌と、ダイヤモンド研磨によって出来る滑らかな表面を対局として視覚化することにより、簡潔で力強い空間を出現させようと思いました。</p> <p>日本では都市の歴史や重厚感を視覚化することが難しいため、石という素材で恒久感のある空間を創りたいと思いました。</p> <p>作者: 前川 義春 東京芸術大学大学院美術研究科修士 ミュンヘン造形芸術大学大学院修士 現在、広島市立大学名誉教授</p>
C	<p>[2011年度設置] 作品名:「WORLD」 H 1.8m×W 1.8m×D 1.8m コンクリート (2002年制作)</p>	<p>内なる世界を創りました。コンクリートパネルで外枠をつくり、内側の螺旋状の空洞を発泡スチロールで造形して組み込み、一気にコンクリートを流し込みます。コンクリートが固まってから、発泡スチロールを抜き取り造り上げたものです。外見は単純な立方体の形状をしています。その内部にはDNAを思わせる螺旋形態が見え、内なる広大な世界を想像させようと思いました。</p> <p>作者: 和田 礼次郎 広島市立大学大学院芸術学研究科修士 東京芸術大学大学院博士後期課程修士 文化庁新進芸術家海外研修生としてベルリン派遣 現在、パリ在住</p>	D	<p>[2015年度設置] 作品名:「10mの流動体」 H 0.75m×W 10m×D 0.75m 御影石 (1998年制作)</p>	<p>長さ10メートルの白御影石に流動的な形態を彫刻し、4つに分割した作品です。展示される「場」に応じて直線状に並べたり、湾曲させて展示する等のバリエーションが出来ます。</p> <p>此の度は緩やかに湾曲させて設置する事で、より彫刻の流動性を強調し、作品を抱合する空間に躍動感を与えると共に、石という素材から来る静かな恒久性を感じる「場」を創りたいと思います。</p> <p>作者: 前川 義春 東京芸術大学大学院美術研究科修士 ミュンヘン造形芸術大学大学院修士 現在、広島市立大学名誉教授</p>
E	<p>[2016年度設置] 作品名:「雪鳥(ゆきがらす)」 H 1.5m×W 0.5m×D 1m インド産砂岩 (2013年制作)</p>	<p>日本では害鳥として捉えられることが多いカラス。本来は森林などに生息しており、近年都会にも急速に生息域を広げているハシブトカラスをモチーフとしています。</p> <p>滋賀出身である私自身を含め、故郷と異なる土地で懸命に生きる人の姿の陰のイメージを、同じ現代社会で生活する鳥(からす)として具現化しました。</p> <p>日々変化する社会に悲観しながらも将来をひたむきに追いかける人の姿を、環境の変化に順応する姿、懸命に生きようとする工夫、周囲からの評価を歯牙にもかけない鳥に各々の共通点を石彫作品として象(かたど)りました。</p> <p>作者: 川西 千尋 広島市立大学芸術学部卒業</p>	F	<p>[2016年度設置] 作品名:「くもあい」 H 1.15m×W 0.75m×D 0.7m インド産砂岩 台座:H 0.5m×W 0.7m×D 0.7m、玄武岩 (2013年制作)</p>	<p>“雲合い”とは、移り変わる模様を表した言葉です。</p> <p>この言葉に影響を受けて、雲をイメージした曖昧(あいまい)な形に溶け合っさっていく人の不思議な状況を、鑿跡(のみあと)の表情を使い表現しました。</p> <p>雲合いのように変化する日々の中にも、変わらない軸としてある人の存在を、石の重厚な素材感によって表そうと思い制作しました。</p> <p>作者: 西尾 愛 広島市立大学大学院芸術学研究科修士</p>